

主 題：神の栄光のために2

聖書箇所：ローマ人への手紙 15章5－6節

今回は1－4節を学びました。

1. 強い者への勧告 「私たち力のある者は、…べきです。」 1－2節**(1) 弱い人を助ける 1a節**

信仰において成長している者たち、神の真理を正しく理解し、主の前を正しく歩んでいる人たち、でも、教会にはそうでない人たち、信仰の弱い人たちもいるわけです。パウロがその強い人たちに勧めたことは「彼らを助けてあげなさい。」ということです。あなたの持っている個人的な考えを押し付けてしまったり、もちろん、彼らがそれを理解しているなら良いのですが、一方的に押し付けてしまったり、また、批判的であったり、すぐにさばいてしまうようなこと、そういったことがあってはならないと言います。

(2) 弱い人に仕える 1b－2節 自分のことよりも彼らのことを考える

そして、あなたたちは却って弱い人たちに仕えていきなさい、自分のことを考えるよりも彼らのことを考え、彼らの信仰の益になること、それを求めそれを行なっていきなさいと、そのように彼は勧めました。

2. 勧告の理由 3－4節

なぜ、そのようなことを勧めたのでしょうか？その理由が3節から記されていました。

(1) 主イエスもそのように歩まれた 3節**(2) また、信仰の先輩たちも同様 4節****3. パウロの祈り：霊的一致 5－6節**

今日見ようとしている5－6節には「パウロの祈り」が記されています。勧めただけでなく、パウロはすべてのことを全能の神の前に持って出て、彼らのためにとりなしをするのです。非常に大切なことです。私たちもすべてのことを神の前に持っていくことができます。私たちがどのようなことを望んでも、事を行なわせてくださるのは神だからです。ですから、私たちはこのパウロがしたように、人々にどう歩むべきか、どうあるべきかを教えることができます。しかし、彼らの心を変え、彼らを導き、彼らを成長させてくださるのは確かにこの神です。ですから、その方の前に祈ることができるのです。その祈りが5、6節に記されています。

パウロは言います。確かに、教会の中にはどこであっても、ローマであろうとエペソであろうとこの浜寺であろうと、いろいろな考え方があって考え方において相違があるし見解の相違がある。しかし、だからといって教会が分裂するようなことは決してあってはならないと。同じ主を信じる者として一つになっていくように、一致するようというのがパウロの祈りです。非常に大切な祈りです。

その理由がこの後に記されています。

1) 誤った一致

教会の一致を図ろうということは私たちが初めて耳にすることではありません。いろんな教会がそのことを目指して、そのためにいろいろな努力をしていると思います。この教会にあって私自身が聞いたことですが、「何かの働きにおいて一つになろう。いろんな相違があっても一生懸命みんなで伝道することによって一つになっていこう。」と。ある目的のためにみんなが一つになる。伝道のためであったり、宣教のためであったり、このような学びのためであったりと、何かの働きにおいてみんなが一つになっていくと、そのように聞いたことがあります。そうしてみながいっしょに何かすることによって、そこに理解が生まれ一致が生まれていくと。ここでパウロが教えている一致はそのような一致かというところも違うようです。

2) 正しい一致

パウロが教えようとしている一致、教会における一致は、何かをすることで理解を深めることによって一致して行くことではないのです。というのは、5節を見ると「どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようになさいますように。」「ふさわしく」とあります。このことばは「キリストに従う、キリストと一致する、キリストと同じ思いを持つ」とそのような意味を持っています。ですから、互いの理解を深めることによってチームとして一つになっていこうということをパウロが言っているのではないのです。教会が、そこに集う一人ひとりのクリ

スチャンが、イエスが持っていたのと同じ思いを共有するようにと、それがパウロがここで教える一致のことなのです。イエスが持っておられた思い、その思いと同じ思いを持つように、そのような思いを持って歩いていくようにと言うのです。私たちが考えなければいけないことは、イエスはどのような願い、どのような思いを持って生きておられたのか、どのような思いを持って歩いておられたのかということです。私たちは二つのことを見ます。

3) 主は何を願い、何を思って生きられたのか？

(1) 父なる神のみこころを求めた

*** 主イエスの証言：**イエスがこの地上におられた時は、イエスは常に父なる神のみこころを求め、そのみこころに従って歩まれました。イエスはそのことを何度も人々に語って聞かせました。例えば、ヨハネ 6：38 では「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行なうためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行なうためです。」と明言されました。また、イエスのゲッセマネの園での祈りの中に見ることができます。マタイ 26：39, 42 「それから、イエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈って言われた。「わが父よ。できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたのみこころのように、なさってください。」「イエスは二度目に離れて行き、祈って言われた。「わが父よ。どうしても飲まずには済まされぬ杯でしたら、どうぞみこころのとおりをなさってください。」。ですから、確かに、イエス・キリストは自分の願い通りではなくて、父なる神のみこころのままに歩いていこうとして、そのように実際に生きられた方です。このようにお話しになったし、イエスの生涯を見た時に、まさに、彼は主に対して忠実に歩いて来られたと言えます。

*** 主イエスの行ない：**そのことはパウロがピリピ人への手紙の中でこのように告白しています。2：6-8 「キリストは、神の御姿であられる方なのに、神のあり方を捨てることのできないとは考えないで、：7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられたのです。：8 キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。」、神が人となり、そして死にまでも従われた。それは、それが父なる神のみこころだったからです。ここには余りにもたくさんの方が記されています。非常に大切なことです。

・ **神であるイエス：**パウロはイエスは神であったと言います。

「御姿」＝その証拠に6節に「神の御姿であられる方」ということばがあります。「御姿」とは外側のこと、外見のことを言っているわけではありません。これは「人の属性、本質、本性、特性」を表わしています。外見がどうであれ、その人が本質的にどのような存在かを表わすことばなのです。ですから、パウロはそのことばを用いることによって「イエスは本質的に神だ」ということを告げたのです。

「神のあり方」＝また、もう一つ、同じ6節に「神のあり方を捨てること」があります。この「あり方」も非常に大切なことばですが、パウロはここで使っています。これは英語に訳すとイコール(=)です。同等であるということです。

ですから、この6節を通してパウロが言いたかったことは「イエスは紛れもなく創造主なる神だ。彼はそのお方と同等である。」です。先ほど敢えて「外見ではなく」と言ったのは、この後出て来ますが、イエス・キリストは肉体を持っていました。神は霊です。ですから、確かに外見においては異なるのです。だから、本質的なことを言っているのです。外側は違うけれども本質的にイエスは神であり、神とイコールであると言うのです。だから、まずパウロは「主イエス・キリストは神である。その方が人となられたのだ。」ということ言うのです。

・ **人となられたイエス**

8節には「キリストは人としての性質をもって現われ、」とあります。この「性質」とは外面的なことです。ですから、パウロはここで、イエス・キリストの外面を見た時に、明らかにだれが見ても人であったと言うのです。だから、この新改訳聖書では「人間と同じようになられたのです。」と書かれています。つまり、「人となった」ということです。どこから見ても私たちと同じであったと言う訳です。

・ **犠牲を払われたイエス**

その人となられた神が何をなされたのか？大きな犠牲を払われました。6節「神のあり方を捨てることのできないとは考えないで、：7 ご自分を無にして、」と続きます。いったい、どのような犠牲を払われたのでしょうか？イエスが捨てられたものとは何でしょう？

a) 捨てられたもの：神としての栄光

それは神でなくなったということではないのです。人々がイエス・キリストを見た時に、彼のうちにその栄光を見なかったのです。ただし、山上の変貌というときに、イエス・キリストがペテロとヤコブとヨハネを連れて高い山に登った時に、そこでイエス・キリストはご自身が栄光に溢れた神であること

を明らかに示されました。彼らはそれを見て驚いたのです。しかし、普段のイエスは確かに、イザヤが言ったように「見とれるような姿もなく」（イザヤ53：2）でした。ですから、まず、ご自分の神としての栄光を捨てられたのです。

b) 捨てられたもの：属性の個人的利用

神としての属性、性質を用いることに関して、限定を敷かれたということです。というのは、イエスは常に父なる神のみこころに沿ったのです。どういう意味ですか？覚えておられるでしょう。イエスは40日40夜断食した後、サタンの誘惑を受けられました。空腹を覚えられたイエスにサタンが最初に言ったことは「あなたが神の子なら、この石がパンになるように、命じなさい。」でした（マタイ4：3）。どうですか？もし、イエスがそこで石ころに向かって「パンになれ」と命じたならパンになったでしょうか？当然です。イエスは神ですから、そのようにしようと思えばできました。しかし、敢えてをしなかったのです。なぜなら、イエス・キリストは父なる神のみこころに従おうとしておられたからです。ですから、神だからどんなこともできるが、そこに制限を設けたのです。ご自分の属性をご自分のために使おうとしなかったのです。

c) 捨てられたもの：ご自分の身分

彼は仕える者となりました。すべての被造物によって畏れられ、敬われ、仕えられるべき創造主なる神が仕える者となったのです。このピリピ2：7に「仕える者の姿をとり、」とあります。「仕える者」ということばは「奴隷」を意味します。主人が奴隷となったということです。私たちはみなこの方に仕えるべき者です。でも、この主人があなたや私に仕える者になってくださったのです。だから、イエスはこんなことを言われました。ルカの福音書22：27「食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょう。むろん、食卓に着く人でしょう。しかしわたしは、あなたがたのうちにあつて給仕する者のようにしています。」、描いてみてください。テーブルがあつてそこに座っている人がいるのです。そして、その人のお皿に給仕する人がいるのです。どちらが偉いかとイエスはおっしゃったのです。明らかに、そこに座つて給仕を受けている者です。食事をしようとしている者です。給仕をする人はその人に仕えているのです。イエスはこう言われるのです。「むろん、食卓に着く人でしょう。しかしわたしは、あなたがたのうちにあつて給仕する者のようにしています。」、給仕されるべき方が給仕する者となった、神でありながら奴隷となったということです。

結局はそこにたどり着きませんか？私たちが集まった時の問題は私たちのプライドです。最後の晩餐に弟子たちが集まった時に、だれが足を洗うかということで彼らはもめていました。なぜなら、足を洗うことは奴隷の仕事だからです。「私はこんなに偉いだから足を洗われて当然です。」と、そのようなプライドが分裂や分派を生むのです。イエスを見た時に、イエスは神だからすべての者から敬われて当然の存在です。しかし、その神が仕える者になったということです。父なる神のみこころに徹底して従つていこうとされたのです。このローマの教会を見た時に、この教会の問題というのは、クリスチャンたちの中に、自分のこと、また、自分の個人的な考えに基づいて行動する人たちがいたことです。そして、その結果、様々な批判がなされていたのです。人に対するさばきが、また、人に対する悪口が横行していたのです。だから、パウロは言うのです。「父なる神の栄光のためにご自分の喜びを捨てられたイエスに目を向けなさい。自分の喜びよりも父なる神が喜ばれることを考えて歩まれたイエスを覚えなさい。」と言うのです。主イエス・キリストがこの地上におられた時に、彼の関心は父なる神のことだけでした。その栄光が現わされることだけでした。「だから、兄弟姉妹たち、あなたたちもそのことだけを願つてそのように歩んで行きなさい。主と同じ心を持ちなさい。どんな時にでも主のみこころに従つて行く、そのような思いを持って歩んで行きなさい。」と言うのです。

◎みこころを行なうことのすばらしさ

もうこれまで学んで来たように、私たちは自分自身の信仰を成長させて行くことが必要です。しっかりみことばを学び、そのみことばの実践に励むことです。それしか信仰の成長を見ることはできません。私たちが何度も見ているように、聞くだけでは成長しないのです。聞いたことを神の助けをもらつて実践することです。そうしてあなたの信仰が成長し、そして、成長しているあなたはそうでない人たちを助けてあげるのです。彼らの信仰が成長するように。もし、私たちのこの群れが、一人ひとりが、そしてあなたが「私は神さまのみこころを求め、そのみこころに従つて行きたい！」と、そのような思いを持って歩んでいるなら、そして、周りにはいる兄弟姉妹も同じようにみこころに従つて歩むように励ましているなら、時にはそうでないことを責めて、みことばにみこころに従つて行くように矯正し導いているなら、主がどれ程お喜びになるかです。神のみこころに従つて行く、それが主ご自身が歩まれたその歩みが私たちに教えることです。そんな思いを持って主はいつも歩んでおられました。

みこころに従うことに関しては、もう、私たちは何度も聞いています。ですから、その大切さは皆さんよく分かっておられるはずですが、今日皆さんにもう一度繰り返すことになるのかもしれませんが、忍耐をもって聞いてください。どうして、みこころに従って生きることがそれ程大切なのかです。なぜ、みこころに従って行くことが私たちには必要なのでしょう？主イエス・キリストのおことばを見たいと思います。そのことについて主は次のように言われました。ヨハネの福音書4章に記されていますが、弟子たちがイエスのところに食べ物を持って来ます。そうするとイエスはその食べ物を受け取らなかったのです。31-34節「弟子たちはイエスに、「先生。召し上がってください。」とお願いした。:32 しかし、イエスは彼らに言われた。「わたしには、あなたがたの知らない食物があります。」:33 そこで、弟子たちは互いに言った。「だれか食べる物を持って来たのだろうか。」と、ちょっと笑ってしまうような話です。イエスはそこでこのように言われるのです。34節「イエスは彼らに言われた。「わたしを遣わした方のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、わたしの食物です。」、それを聞いた弟子たちは多分何のことを言われているのかすぐに分からなかったはずですが。「イエスさま、みこころを行なう話ではなくて、今は食べ物の話をしているのです。」と。ところが、イエスは弟子たちに対して「みこころを行なう」ということを言われました。イエスは勘違いされたのでしょうか？いいえ！イエスは彼らが一番に聞かなければいけないことをお話になったのです。どういう意味でしょうか？「わたしを遣わした方のみこころを行ない」、つまり、イエスは「わたしの父なる神のみこころを行ない、そのみわざを成し遂げることが、」、つまり、みこころを知るだけでなく、そのみこころに従って生きること、それがわたしの食物だとおっしゃったのです。

美味しい食べ物を食べているときにしかめっ面をしている人はどこにもいません。みんな笑顔です。そうでなかったらその食べ物は美味しくもないのかもしれませんが。美味しいものを食べている時は、喜びが顔に出て来ます。「おいしいな！」と言います。イエスが言われたことは、その喜びその満足よりもっとすばらしい喜びと満足をあなたは得ることができるということです。「それは主のみこころに従うときだ」と言われたのです。だから、どんなに自分の好きなように生きても、そこにはこの満足も喜びもないのです。私たち信仰者は、もういい加減に目を覚まさないといけないのです。神のみこころをしっかりと見極めて、神のみことばを正しく理解して、そのみことばに従って行く時に、神はあなたにすばらしい神しか与えることができない祝福を与えてくれるのです。だから、霊的な人たちは喜んでいてのです。その人たちはどんな時でも満足しているのです。感謝しているのです。なぜなら、主に従って生きることによって主の祝福をいただいているからです。不満を口にしたり、悪口を口にしたり、人をさばっていたり、そのような人たちが成長していないことは明らかです。

なぜなら、神が私たちを成長させて行ってくくださるのなら、私たちは主イエス・キリストに似た者に変えられていくからです。イエスのどこを見ても、人々に対する悪口があったり、不平不満を口にしていることなどありません。確かに、いつも喜び、すべてのことに感謝しておられました。物があってもなくても喜びを持って満足を持って歩んでおられました。だから、パウロがこのように言うのです。ピリピ人への手紙4：11「乏しいからこう言うのではありません。私は、どんな境遇にあっても満ち足りることを学びました。」と、ご存じですね、皆さん。パウロは言います。「どんな境遇にあっても私は満ち足りることを学んだ」と。「それは気持ちの持ち方ですか？違います！神のみこころに従って行くときに、神はそのような満足を与えてくださるのです。なぜなら、満足も喜びも感謝も、そのような祝福は神がくださるものだからです。それを受けるにふさわしい歩みをしているなら、神は私たちに与えてくださるのです。みこころに従って行くことの大切さ、それはこのようにみことばが教えてくれます。

もう一度今日のテキストに戻って、パウロは「あなたがたはイエスさまが持つておられたその同じ思いを持つように！」と言いました。歩みに関しても5節の初めを見てください。「どうか、忍耐と励ましの神が、…を持つようにしてくださいますように。」とあり、4節には「…それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。」とあります。つまり、すでに見たように、聖書のみことばは私たちに忍耐と励ましを与えてくれます。かつての信仰の勇者たちがどのように歩み、それに対して神がどのような祝福を与えられたのか、また、その罪に対して神はどのようなさばきを下されたのか、それらのことを学ぶことによって、聖書のみことばを通して、私たちは確かに励ましを受けます。「そうだ、このように神に従い続けていけばいいのだ」という忍耐をもらいます。そして、みことばが言うように確かに、私たちは希望を持って生きます。聖書はこのような働きを我々の内にします。神は聖書を用いてこのようなことをなさるのです。

そのことを知っていたパウロは同時に、その忍耐と励ましをもたらしにくくださる神に直接このことを求めるのです。なぜなら、神があなたや私の内に働いてくださって、私たちの心を励ましてくれるからで

す。何度も私たちが見ているように、神が私たちにこのように生きなさいと言われたなら、神はちゃんとそれを実践できるための力を—これを恵みと呼ぶのですが—備えてくださっています。私たちに必要なことは、この神の助けをいただきながら生きていくことです。パウロがしたこと、それは、力の源である神に彼らのみことばの実践を求めていくことでした。「神さま、どうぞ彼らを励ましてくださるように。」と。そして、彼らに対する祈りを見ても、パウロはこの神が、忍耐と励ましを与える神があなたたちを励ましてくださってこのような歩みを為して行くことができるようにと祈ったのです。主のみこころに従うように、神のみこころに従って行くように、それが、パウロが最初に祈ったことでした。

教会にあって一致していく、その一致というのは、このような思いを持った者たちが増やされて行くことによって起こって来ます。教会の中で一人ひとりが私は主のみこころに従って行きたい、主よ、どうぞ私を助けてください。あなたもいっしょにそのように歩んで行こうと、そうして兄弟姉妹が励まし合いながらみこころに従っていくなら、そこに神が一致をもたらすと言うのです。

(2) 神への栄光を願った 6節

二つ目は6節「神への栄光」です。父なる神のみこころを教えたパウロは、今度は、神への栄光に話を進めて行きます。主イエス・キリストがみこころに従って行かれた。それが神のみこころであり、神が喜ばれることだからです。同時に、主イエス・キリストが父なる神のみこころに従っていったのは、その時に神の栄光が現わされることを知っていたからです。私たち救われた者たちの最大の目標は、私たちの神が私たちの日々の歩みを通して喜んでくださることです。皆さん、そのような思いを持って歩んでおられるでしょうか？6節でパウロは「**私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえるためです**」と言っています。言い方を変えると、神を喜ばせること、それが一番の願いだということです。そのような思いを持って神を喜ばせる選択をしそのように歩んでいるなら、私たちを通して神の栄光が現わされて行くのです。ですから、パウロはそのことを願ったのです。そして、教会の一人ひとりがその願いを持って、その目標をしっかりと持って歩んで行くように、その時に教会の中に一致が生まれて来ると言います。すごいことと思いませんか？教会員ひとり一人が神の栄光を現わすために生きているのです。神に喜んでいただくことが何かを考えてそれを選択しているのです。神がそのような歩みをしている個人を群れをどれほどお喜びになるかです。パウロはそうして一致しなさいと言ったのです。

そのことを教えているのですが、この6節を見た時に、パウロはここでイエスがいったいだれなのかという説明を加えています。新改訳聖書では「**私たちの主イエス・キリストの父なる神**」と訳しています。実は、このギリシャ語はこのように訳せるのですが、同じ文がⅡコリント1：3、11：31、エペソ1：3、1ペテロ1：3にも出て来ます。これらのすべてのところで新改訳聖書はこのローマ15：6と同じように、「**私たちの主イエス・キリストの父なる神**」と訳しています。でも、そのギリシャ語の文を直訳するなら次のようにも訳せるのです。それは「**私たちの主イエス・キリストの神であり、父をほめたたえる**」と。新改訳は「父なる神」と一つにしたのです。でも、この文章はイエス・キリストの神、イエス・キリストの父と分けることもできるのです。実際に、そのように訳している聖書もあります。新共同訳を見ると「心を合わせ、声をそろえて私たちの主イエス・キリストの神であり、父である方をたたえさせてくださるように。」とあります。このように二つの訳ができる、そういうギリシャ語が使われているということです。

◎私たちの主イエス・キリストの神＝主イエスの人間性を表わしている

このように神と父を分けた時に、ある人たちは言うのです。ちょっとそれはおかしいのではないか、イエス・キリストの神というのはおかしいのではないかと。全然おかしくないのです。そのように訳しても問題ないのです。なぜなら、「**私たちの主イエス・キリストの神**」と言った時に、イエスは人間であるということを明らかにしているに過ぎないからです。イエスが十字架にお架かりになった時に「どうしてわたしをお見捨てになったのですか。」と言われましたが、その時に「わが父、わが父」と言いましたか？主イエスは「わが神、わが神。」とそのように父なる神を呼んでいました。人として、私たちの罪を負った罪人として十字架で死んでくださったのです。その時にイエス・キリストはそのように叫ばれました。だから、この15：6で、私たちの主イエス・キリストの神と訳したことに何の問題もないのです。なぜなら、イエス・キリストは見て来たように「完全な人」であったからです。

◎私たちの主イエス・キリストの父＝主イエスの神性を表わしている

同時に、「**私たちの主イエス・キリストの父**」と言った時に、ここではイエス・キリストの神性を、神であるということを表わしているのです。ユダヤ人たちがイエスを殺そうとした一つの大きな理由は、イエス・キリストの主張を彼らが理解したからでした。ヨハネの福音書10章の中にも繰り返し出て来ますが、イエス・キリストが自分は神だと主張した、それを聞いていた人々はそれを理解したゆえに神

に対する冒涇だと言ってイエスを殺そうとしたのです。イエスは明確に主張されました。「わたしと父は一つです。」と。そうすると、人々は石をもってイエスを殺そうとしたのです。なぜなら、イエス・キリストの主張は明確だったからです。イエスははっきりとご自分が神だということを言われたのです。この6節の最後で、パウロはイエス・キリストがこういうお方であるということを私たちに教えてくれています。

さて、私たちの信仰の成熟度がどうあれ、今日、パウロは私たちにこのようなことを教えてくれました。主イエス・キリストと同じ思いを持って、まず、あなたが生きていくように。主のみこころに従って行きなさい、主がそのように歩まれたから。そして、神の栄光のために歩んで行きなさいと。そして、その大切さをパウロは次のように説明します。6節「あなたがたが、心をつにし、声を合わせて、…神をほめたたえる」と。

(a) 「心をつにし」：内面的な一致のことです。心のことです。

(b) 「声を合わせて」：外面的な一致のことです。つまり、パウロが私たちに言っていることは、信仰者一人ひとりの心が神に対する感謝に満ち溢れ、神に対する喜びに満ち溢れている、その時にその心から喜びや感謝が形となって出て来るということです。しかも、それは個人だけのことでなくて群れ全体としてそうであると言うのです。

パウロはローマの教会に手紙を送っているのです。個人個人の信仰が成長し、心から神を崇めるような者として成長して行く。そして、そのような人が増やされて行くことによって、その人たちが一つの心を持って真の神を崇め始める、神はそのことを望んでいると言うのです。だから、教会の中にどんなに小さな分裂であっても分派であっても、それはその働きを助けるものではないのです。その妨げとなるのです。私たちが一つになることによって、主のみこころに従う者として、主が喜んでくださることをいつも考え、それを選択する者として、主の栄光が現わされることを願いながらすべてのことを為す、そういう信仰者としてあなたが変わらされて行き成長することです。神はその礼拝を喜んでお受けくださるのです。だから、一致することが非常に大切なのです。なぜなら、今、私たちが見て来たように「心をつにし、声を合わせて、…神をほめたたえ」て行くからです。パウロがそのことを祈ったということはそれが神のみこころだからです。それを神が望んでおられるからです。

私たちがこうして集まった時に、私たちは神に礼拝をささげます。神に賛美をささげます。しかし、皆さん、あなたの心が今見て来たように「主よ、あなたのみこころを教えてください。私はそれに従います。」という願いを持って、そういう歩みをしていなかったら、また、「神さま、私はあなたが喜ばれることを選び、それを選択して生きて行きたいです。あなたの栄光が現わされること、それだけを求めて生きて行きたいです。」と、そのように願い、そのように生きていなかったら、その人がささげる礼拝を神は喜んでお受けにならないのです。

アモス5：22-23にこのようなことが記されています。「たとい、あなたがたが全焼のいけにえや、穀物のささげ物をわたしにささげても、わたしはこれらを喜ばない。あなたがたの肥えた家畜の和解のいけにえにも、目もくれない。：23 あなたがたの歌の騒ぎを、わたしから遠ざけよ。わたしはあなたがたの琴の音を聞きたくない。」と。私たちを満足させる自己満足の礼拝をささげることは幾らでもできるのです。しかし、問題は神がそれをお喜びになっておられるかどうかです。神に感謝をささげるために私たちは集まって来るのです。神に私たちのほめ歌をささげるために集まって来ているのです。しかし、それを神が喜んでお受けになるためには、私たちの心をしっかりと吟味しなければいけないということです。きっと皆さんも考えてくださっていると思います。今日の私のこの礼拝を神が喜んでお受けくださっているかどうか？もし、あなたの心の中に罪があるならば、残念ながら、その礼拝を神は喜んでお受けになりません。どんな弁解も神の前には通りません。なぜなら、神は私たちの心をすべて見ておられるからです。でも、皆さんはこのみことばが教えてくれているようにそのように歩んでおられると思います。「神さま、私はあなたのみこころを行なうことを喜びとします。失敗ばかりするけれど、私はあなたのみこころに従って生きて行きたい。どうぞ、私を導いて行ってください。あなたが喜ばれないことを選択してしまうことが多いです。赦してください、神さま。私はあなたが喜んでくださることを選択して、あなたの栄光を現わして行きたい。私を助けてください。」と、きっとそのような祈りをもって、そのような願いをもって歩んでおられると思います。そして、そのような思いをもって神の前に立っているなら、神はあなたの礼拝を喜んでお受けくださいます。そして、そういう人々が集まっている私たちの公の礼拝も神は喜んでお受けくださるのです。

ですから、私たちがこうしてともに集まる時に、どうぞ一致する働き人、一致をもたらず働き人として歩んでください。歩み続けてください。まず、あなたがしっかりと神を見て、そして周りの兄弟姉妹も

同じように神を見て、主の栄光のために生きて行こう、神が喜んでくださることをやって行こうと、そのように励ましながら、そのように導いてくださる人、そんな人でありたいと願います。そんな人として、どうぞ皆さん益々歩んでください。私たちがこの地上に生かされている目的、それは、私たちを救ってくださった方の栄光のためです。この方のすばらしさを世に証するためです。そのことはこの7節からもパウロは私たちに教えてくれます。みこころを求める人になってください。そして、主が喜ばれることをいつも考えて、それを選択し、そのように生きる、そんな信仰者として歩み続けてください。神を喜び、神に喜ばれる信仰者として、この一週間の歩みをなしてください。私たちの神は確かに栄光をお受けになるにふさわしい唯一のお方です。その方のために生きる、そんな信仰者として、そんな歩みを継続いただくように心からお勧めします。

《考えましょう》

1. 「互いに同じ思い」（5節）とは、どんな思いのことでしょう？
2. 私たちキリスト者は、何のために救われたのでしょうか？
3. 「心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえる」ことが、どうして重要なのでしょうか？
4. 「心を一つにし、声を合わせて、私たちの主イエス・キリストの父なる神をほめたたえる」ためには、個人として、また、群れをしてどうすればいいのでしょうか？